

## 「木村文庫」

—熱心努力の収集から巡りあうご縁—

川村 順子

### 1.はじめに

本年は国際極年 (International Polar Year, 2007-2009) として、各国で極地観測に関するシンポジウムが行われている。日本は、第3回の国際地球観測年(The International Geophysical Year (1957-58))、南極観測隊を編成し、昭和基地を設営した。途中やむなく中断(1962.2-1965.11)しながらも、観測を続けて 50 年になる。その最初の観測隊よりもさらに遡ること 46 年前(明治 45 (1912) 年)、日本人として初めて白瀬巖 (しらせ のぶ) 中尉(1861-1946)が、帆船「海南丸」で南極探検を行った。この白瀬南極探検の資料収集のご縁から、当室に寄贈された「木村文庫」をご紹介します。

### 2.木村義昌氏

木村文庫は、木村義昌氏(1913-1998)の蔵書について寄贈を受けたものである。『個人文庫事典』によると、木村氏は、拓殖大学在学時、山岳部に所属し、白瀬中尉と知り合う。大学卒業後、建築学会に勤務のかたわら、昭和 8 (1933) 年に白瀬中尉を会長として谷口善也氏とともに、日本極地研究会を設立し、南極・北極地域の探検史を中心に研究した。著書に

『南極:歴史と将来』『白瀬中尉探検記』『帆船と極地探検』等がある。

### 3.「木村文庫」

寄贈当時の職員松里女史は雑誌『極地』に由来を残している。1995 年夏、女史が、当研究所教官とともに木村氏の九十九里町のお宅に伺った。氏の蔵書を、国立極地研究所図書室(当時)と、秋田県金浦町の白瀬南極探検隊記念館に寄贈したいと相談を受けたのである。極地研設立当時の、白瀬南極探検の資料収集のご縁からお声がかかった。すぐにでもとの本人の要望に、生涯をかけて収集した愛着のある蔵書を手放されたら気落ちされるのではという懸念から、引取りをいったん見合わせた。1998 年 4 月氏が亡くなると、奥様木村うら子氏より寄贈されることとなった。洋書 191 冊、ロシア語図書 3 冊、和書 49 冊の、珠玉の 243 冊が木村文庫として当室へ収蔵された。

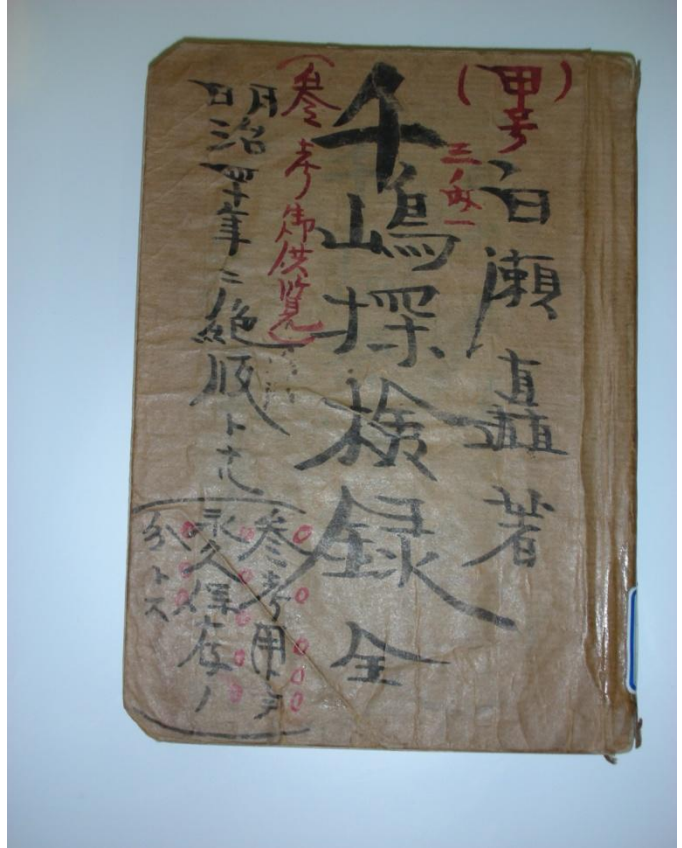
数々の初版本を含む極地の探検史コレクション、中でも白瀬中尉に由来する、献辞・サイン入りの本など、当室がそれまで収集してきた極地探検史を質の上で補完するものである。次に数点を、写真を添えて、紹介する。

出典：図書館雑誌 Vol.101 No.6 p.386-387, (2007.6)

ウチの図書館 お宝紹介！ 第62回国立極地研究所情報図書室

#### 4.千島探検録（白瀬轟著，東京圖書出版，1896）

刊本ではあるが、表紙は白瀬中尉の自筆となっている。多くのメモや、赤線での訂正、書き込みがある。264頁に図版4枚が付されている。内容は、千島探検の状況および気候等の調査、海陸動植物の調査および狩猟方法について記述されている。『千島拓殖策私見』『千島警備隊設置私見』の2編の論文を収録する。白瀬中尉という人は、寺子屋時代に北極の話聞いて探検を誓い、極地探検に備えて「禁酒、禁煙、茶断ち、湯断ち、寒中でも火にあたらない」の五カ条を実行していた。南極探検後、その経験について全国各地で講演を行い、また、『南極記』（南極探検後援會編、南極探検後援會/成功雜誌社（発売）、1913）に記録を残している。



出典：図書館雑誌 Vol.101 No.6 p.386-387, (2007.6)

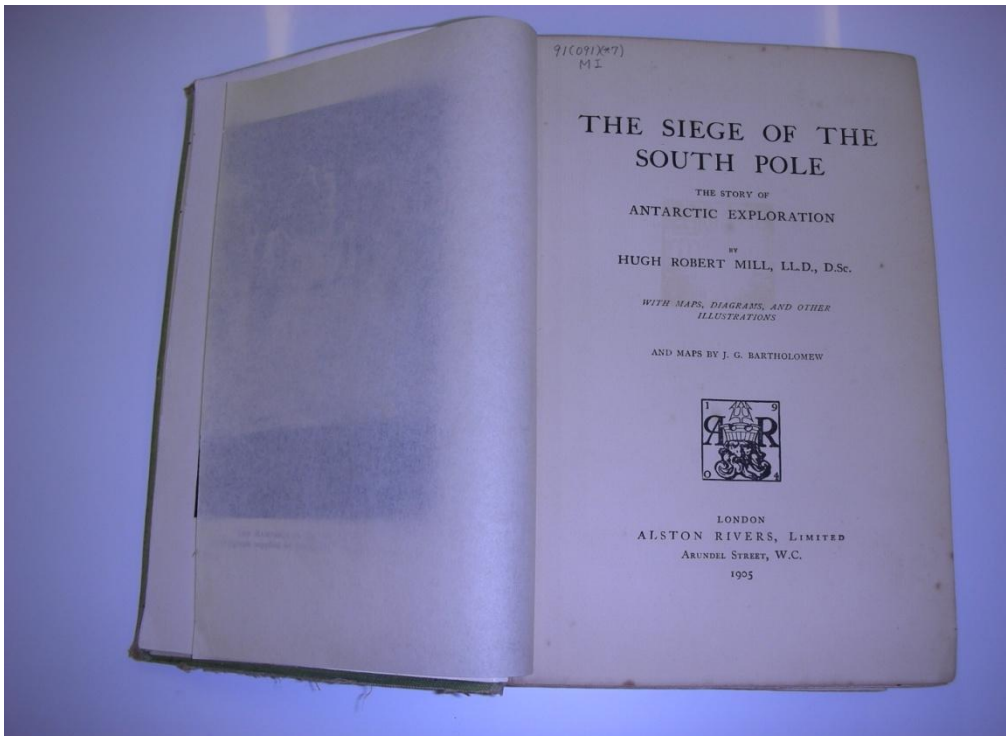
ウチの図書館 お宝紹介！ 第62回国立極地研究所情報図書室

### 5. The Siege of the South Pole. (by Hugh Robert Mill. Alston Rivers, 1905)

先の谷口氏によると、南極の歴史について最も信頼のおける、しかも誰もが権威書とみとめる著作である。著者ミル (1861-1950) は地理学の方面で大きな仕事をし、この本を書いたころは Geographical Section of the British Association の部長をつとめ、出版2年後には Royal Meteorological Society の会長でもあった。執筆には3ヵ年を費やし、30年間の極地関係書を漁った知識を総合したものだと言われる。Mill は常に極地に強い関心をはらい、特に南極については当代一流の知識の倉庫といわれた人で、王立地理学会々長だった J.M.Wordie も、Mill の南極に尽くした

功績に絶大な賛辞を惜しまなかったほどである。

内容は、ギリシア時代から筆を起し、20世紀初頭までの各国の探検を正確に記述してある。この本では、Shackleton(1874-1922) の1909年第1回の探検より以前までの諸探検にふれている。これ以後の探検については例えば G. Hayes, The Conquest of South Pole.1932 (当室所蔵) などが挙げられる。以上の2巻を備えれば一応戦争前までの南極史に通ずることができる。



出典：図書館雑誌 Vol.101 No.6 p.386-387, (2007.6)

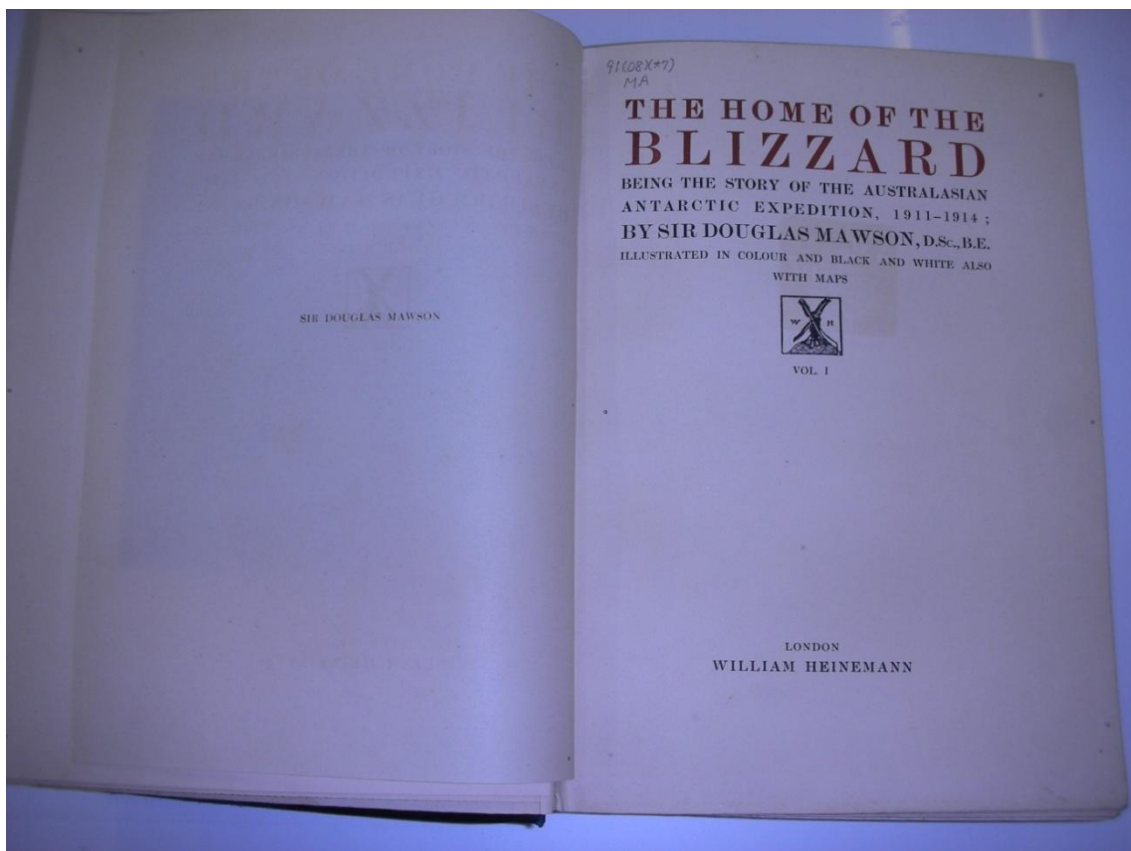
ウチの図書館 お宝紹介！ 第62回国立極地研究所情報図書室

## 6. The Home of the Blizzard, Australasian Antarctic Expedition, 1911-14

(by Sir Douglas Mawson, W. Heinemann, [1915])

1915年発行の2巻本である。同じく谷口氏による紹介であるが、Mawson第1回の探検記で、文は人柄を表わすのか科学と鉱物を専門とする学者風の硬直さであるが、やはり探検記中の圧巻である。Mawson(1882-1958)はイギリスのフリジングホール生れ、少年のころ家族と共にオーストラリアへ移住、シドニー大学を出て後アデレード大学教授になった。

Scott(1868-1912), Amundsen(1872-1928), 白瀬中尉そしてFilchnerなど、南極探検のゴールデン・エイジの中にあつて学者探検家として他隊におとらぬ冒険を試みて万丈の気をはいた。彼のこの特異の題名の報告書 *The Home of the Blizzard* はScottの *The Voyage of the Discovery*, Scott Last Expedition, Shackletonの *The Heart of the Antarctic* などと共に欠くことのできない優れた報告書である。



## 7.南極探検 (原田三夫、松山思水著、昭和5年、萬里閣書房蔵版)

世界探検全集第二巻にあたる。当時日本で初めて著述された、各人の南極探検の紹介である。Gerritz (オランダの航海者) が始めて南方の氷を発見したところから、Cook 大佐による南極探検やサウザン・クロス号、ディスカバリー号の探検をも詳細に述べている。さらに項を進め、白瀬中尉、Amundsen, Scott, Shackleton, Byrd(1888-1957)の探検についておのおの探検記をもとに再構成し、記述は迫力満点である。図版も多く、また原典も紹介していることから、旧仮名遣いではあるが、極地探検に関心のある方は、ぜひ一読をお勧めする。

## 8.極地の探検・北極 (加納一郎著、時事通信社、1960)

次に北極についての一冊として、先の G. Hayes も The Conquest of North Pole を著述しているが、日本語で書かれた図書を紹介する。著者加納氏は『極地の探検・南極』ほか、翻訳も含め極地関係の著作を続けられた元朝日新聞記者である。

内容は、北極探検を行う準備としてフラム号を構想し、制作・運行した Nansen(1861-1930)の探検から、Amundsen, Wilkins(1888-1958 と Ellsworth(1880-1951)など初期の北極探検の様子、ノーチラス号・スケート号の両潜水艦の航行の様子を報告している。さらに、ソビエト・ロシアの北極活

動や 1960 年当時の各国の観測体勢についてなどがある。

## 9.熱心努力の収集

最後に、当研究所の由来と当室設立以来より尽力された松里女史の収集についてご紹介する。

当研究所は、当初、国立科学博物館に極地関係の資料室兼事務室が設置されたのを皮切りに、順次極地学課、極地部、極地研究部、極地研究センターと発展的に改組されてきた。しかし主に大学連携を強化することなどを理由に、昭和48年(1973)国立大学共同利用機関として、創設された。

現在では、総合研究大学院大学の1機関として、博士五年制コースを持つ教育機関でもある。主な蔵書は図書と学術雑誌であり、今日では、電子ジャーナルさえも6000タイトル近く提供している。

そして当室には、木村文庫に限らず、前々任の松里女史の収集した、極地探検関係の資料がひっそりと、しかしたつぷりと所蔵している。東京大学医学図書館から転任された女史が、35年間の勤務のうちに、日常業務のかたわら、収集したい資料のリストを作成され、業者と連絡を取り合い、そして所内の理解を得ながら予算を取り付けて収集されてきた成果である。

松里女史の収集で特筆すべきは、関連分野の雑誌バックナンバーコレクションである。

Journal of Geophysical Research や Nature,

出典：図書館雑誌 Vol.101 No.6 p.386-387, (2007.6)

**ウチの図書館 お宝紹介!** 第62回国立極地研究所情報図書室

Science, Geographical Journal などが初号から揃えられている。これらのタイトルのほかにも、当研究所の研究分野、宙空圏・気水圏・地学・隕石・生物関係の雑誌について、関連あるものは初号から所蔵しているタイトルが多い。このため、当研究所から外部へ文献を取り寄せることは、年間100件程度で済んでいるのである。

さらには、20世紀初頭の極地探検報告書のコレクションも他ではみられないであろう。各国が競って探検隊を編成し、出奔した頃の観測記録である。何世紀をも遡るといふ資料ではないが、出版形態が当時モノグラフ様であったため、冊子の厚さが薄く、表紙も厚紙程度で、もろく、傷みやすい。また、国内他機関での所蔵は非常に少ない。これらの中には、詳細な動・植物の記録が多く含まれている。所外からの利用はだんとうつで、記録のその緻密さ、現代にも通用する完成度に驚嘆する。そして、このような相互利用に十分答えていくことのできる、豊かな資料群に改めて感じ入るのである。当室は410㎡の小規模な空間の中で、資料数は製本雑誌も含めて410㎡の中に約47000点であるが、極地関係資料が濃密に凝縮された、奥行き深い図書室である。

## 参考文献

IPY

history.(2007),<http://www.ipy.org/index.php>

?/ipy/history/

個人文庫事典(2005),日外アソシエーツ, p.248.

松里房子(1999)極地研図書室とともに歩んだ35年.極地,35(1).,pp.52-57.

谷口善也(1957)文献について.建築雑誌 Vol.72No.842 ,pp.81,65.

国立極地研究所要覧昭和48・49年度,(1976), 国立極地研究所, 94p.